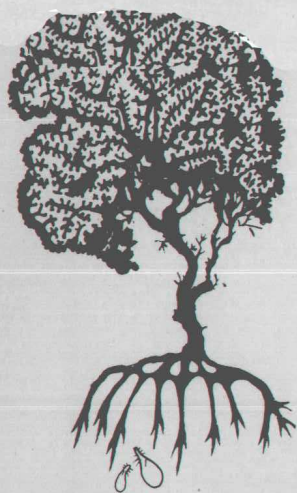




交國出立太朗の



喜葉の

交際亭太郎

道

もぐらの言葉

昭和四四年二月二八日 第一刷発行

著者 安岡章太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号・一一二

電話・東京(九四二)一一一一(大代表)／振替・東京三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価 五八〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

I 《私の鑑賞席》

抽象的なアコガレの街	11
きょうは三越 あすは廃兵院	21
インディー・レース 見る錯覚と見られる錯覚と	30
美観について	40
サーカスと学校	50
すもう感傷記	59
トイレットの孤独	69
〈病気〉の人格	79
情緒の根元	91
刑務所の美学	103
ステレオ三味線協奏曲	114
ふるさとへ帰る	126

Ⅱ

《わがまち東京》

築地魚河岸 139

〈コーヒー道〉のウラおもて 151

民主的な、あまりに民主的な…… 158

夜のデパート 166

道路のある風景 173

動物愛護のおかしな世界 179

芸能プロダクション 186

のし歩くヘアイビー族に物申す 194

寄席 201

高級フランス料理店 208

上野 214

〈オートクチュール〉について思うこと 221

Ⅲ

なまけの恥 231

毛嫌い 244

嗅覚と偏見 248

もとめよ しからば与えられん 252

オキナワ病について 256

〈落第〉この青春の予期せぬバカンス 269

幸福 278

耳と愛情について 288

わが心に一匹の犬のやどりて 295

Ⅳ

アーメンの感覚 301

顔の印象 308

遠藤周作 314

感動と不安 320

家並みの思想 322

眼の下の屋根 325

「海辺の光景」 337

「暗夜行路」 342

喪われた街 344

七生報国 349

文体について 353

贅沢な文学 357

あとがき 367

もぐらの言葉

安岡章太郎随想集

抽象的なアコガレの街

△私の鑑賞席↓

有楽町かいわいというのは、何となくとらえどころのない街だ。人がせかせか歩いているという点では、ニューヨークに似ている。いつか堀田善衛氏と、ガード下の裏通りをとおっていたら、堀田さんは突然、

「あつ、こりやエライことだ」と大声を上げ、

「どういうわけか、おれはいまモンパルナスの地下鉄の駅を下りた横丁を歩いているツモリになっていた」

と、長い両手と上体をユラユラさせながら、妙に気味の悪い声で言った。

部分的にみれば、都会の街角というのは、世界中どこでも同じようなところがある。いや、部分的にみなくたって世界中の街は、だんだん同じようなものになりつつあるわけだろう。けれども有楽町の町並みのツカマエどころのなさというのは、そういうことのためではない。人は大勢歩いているのに、何となく人臭くなく、街そのものが妙に抽象的で、へんにツルツルしているのである。なぜだろう？ 結局のところ、それはここに人の住んでいる気配がないためだとしか考えられなかった。

銀座、日本橋、上野、浅草、池袋、新宿、渋谷……。東京の盛り場を思いつくままに上げてみると、それぞれ先ず人が住みついて、そこから発展した街だということがわかる。しかし有楽町から日比谷へかけて建物はウンとあるけれども、電車の駅と会社や官庁のビルの外に何も無い。寝泊りする人はいるだろうけれども、そこに住んでいる人は誰もいない。例外は、お堀の向こうの黒い森のなかのお城で暮らしている天皇陛下だけである。

十年ばかりまえまでは、日比谷よりのガード沿いの通りに一軒の銭湯があつて、十二時ごろ前を通ると、蝶ネクタイにサンダルをつつかけたバアや喫茶店の従業員らしい男や、ウェイトレス風の女の子が、洗面器をかかえて出たり入ったりしているのにぶつつかつたものだが、いつの間にかそれもなくなつて、あとには何かのビルが出来ている。

私は、ここに有楽町の街の移り変わりを書くつもりはない。ただ江戸時代から、ここは当時のサラリー・マンである侍屋敷の跡であり、この街のヨソヨソしさは、そのころからのものであるに違ひないと思うだけだ。そして、そういう一種の無人地帯だから、ここには新しいものがどんなに這入りこめたわけだろう。新聞社、裁判所、劇場、教会、生命保険、等々……。喫茶店や映画館も、このへんのものは何となくツルツルしている。ストリップ・ショーの踊り子の体つきさえ、新型自動車みたいにピカピカしていて、舞台上に手を延ばして、あちこち触ったりは誰もしない。もうずいぶん前のはなしだが、一度、遠藤周作、吉行淳之介と三人で、何かの会のかえりに日劇ミュージック・ホールへ入り、舞台で半裸の女が縄でグルグル巻きにされているのをパッとほどく手品をやつていて、お客にその女を縛らせるといふので、遠藤が早速とび出して行つたの

はいいが、舞台の上で心細くなったのか、

「オーイ、安岡。おまえも一緒に手伝えよ」

と、劇場中にひびく声で私を呼んだのには閉口させられた。きっと満員電車の中で、見知らぬ婦人からいきなり「チカン」呼ばわりされたら、こんな気持ちになっただろう。そういう何か、冷酷無情な雰囲気、この街にはある。

シアター・レストラン “インペリアル”

サマー・フォーリーズ

ミゲール・アマドール・ショー

おそろしく長ったらしい片カナばかり並んだそのショーに、化粧品のポスターで、このところ一躍有名になった前田美波里が出演しているのを観ようということになった。すると同行の風間完画伯は、

「なんだ、これは……。セックス・アピールの全然ない娘じゃないか」

と前田嬢の水着の写真を一と眼みるなり、カゼでもひいたような声で、そう言ったきり横を向いてしまった。なるほど、言われてみれば、その写真は単に外人並みに堂々たる体軀の、鼻のヌーと大きな女の子が無表情にこちらを向いて立っているだけであり、およそ性的魅力には欠けている。

「そうだなア、なんだかこれは鎌倉の大仏さまと、エジプトのナセル首相をたして、二で割った

みたいな顔つきだなア」

私は、なぜか狼狽気味に、そうこたえた。じつは前田嬢を観に行こうと提案したのは私であり、それを風間さんに一言のもとに、セックス・アピールなしとキメつけられると、急に自分の美意識に自信がなくなつて来たのである。

実際、おれとしたことが、何でこんな女の子の踊りなんか観に行く氣になつたのだろう——？正直に言つて私には、どこか「舶来上等」趣味があり、外国製ときくと前後をかえりみずに有り難がるクセがある。それが、いかに馬鹿げたことかは、重々承知しているつもりだが、タバコでもエンピツでも、舶来と国産と二つ並んでいると、つい舶来の方に手を出してしまう。前田嬢の場合でも、彼女が混血だというだけで、心を動かされているところがあつたにちがいない。

それにしても、セックス・アピールのない前田嬢の水着姿のポスターが、その化粧品よりもさきにポスターの方が売り切れたというほどの人氣をあつめたというのは、この「舶来上等」趣味が、私だけではなく日本人全般にあるためではなからうか。それとも、セックス・アピールのないセックスというものが、われわれに何か眼に見えない欲求を満たしてくれるものがあるのだろうか。いや、混血児というものと、セックス・アピールのないセックスというものとは、どこかで通じ合うところもあるようだ。混血児に対する興味が、西洋や西洋人に対する有形無形の劣等感から生まれているとすれば、セックス・アピールのないセックスは、セックスに対する臆病なアコガレを安全なかたちで満たしてくれるものということになりはしないか。——なんだか馬鹿に回りクドイ言い方になつたが、この抽象的なアコガレなり好奇心なりと、有楽町、あるいは帝国